

四万十市西土佐地域半家地区の秋祭り —— 芸能の共時的・通時的アプローチ ——

川内由子・岩井正浩(神戸大学名誉教授)

Autumn Festival in Shimanto City Nishi-tosa, Hage Area

Yuko KAWAUCHI and Masahiro IWAI

ABSTRACT

Since 1987 our group has been doing research in many folklorical performing arts at the river Shimanto Basin, mostly in the upper and middle parts. We studied not only performing arts, but concurrently folk, industry, and religions, to make clear various phases of performing arts. In this paper we examined Shimanto city Nishi-tosa, Hage area.

We investigated many performing arts of “Aki-matsuri” at “Tenman-gu” november 1992, 1994, 2013. The main ceremonies of “Aki-matsuri” are “Hanatori-odori” and “Itsusika-odori”.

An autumn festival, “Hanatori-odori” kept its former style and “Itsusika-odori” is recovering the previous shape in Hage area. A festival plays a big role in maintenance and development of the community in the local area. For the local residents, high consciousness of tradition and the succession of folk entertainment is desired.

KEYWORDS: “Hanatori-odori”, “Itsusika-odori”, Hage area

I. はじめに

四万十市西土佐地域半家地区は高知県南西部に位置する小集落である。この地域は四万十川中流域に位置し、土佐中村の一条文化・東津野の津野山文化そして伊予の伊達文化が重層し、独特の文化圏を形成し民俗芸能の伝承が行われている。60年以上の歴史を累ねてきた高知よさこい祭りは、最近までこの地域には根づかなかつた。それはこの地域が高知県中部、東部地域とは言葉のイントネーションも違う独特の文化を形作っていたからでもある。このことは芸能は土佐の側からの花取り踊り、神楽、伊勢おどり、伊予の側からの五ツ鹿踊り、牛鬼が混在して根づいていることに典型的に現われている。

本稿はこれらの芸能の中から花取り踊りと五ツ鹿踊りを取上げる。それはこれらが半家地区に伝承されている秋祭りの主役ともいえる芸能であるからである。花取り踊りは四万十川流域だけではなく須崎市をはじめ高知県全域に伝承されている。名称としては他に「花跳び踊り」、「太刀踊り」、「花鳥踊り」、

「庭はらい」などとも呼称され、隊形、衣裳、履物、構成、歌の有無、かぶりもの、演目数、担い手、楽器など多種多様である。歌詞の中に「ナムアマドウヤ」など念仏系の影響がみられることから本来は盆の芸能であったと思われるが、現在は秋祭りで踊られている風流系の芸能となっている。「五ツ鹿踊り」は仙台伊達藩の「鹿踊り」が1615(元和元)年に伊達秀宗と共に宇和島に伝来したものであるが、勇壮で激しい仙台的「鹿踊り」とは異なり、優雅でおとなしい芸能に変化しているが、半家地区では「鹿の子」と称している。歌詞は類似しており、高知県内では旧十和村地吉(現四万十町)、旧西土佐村西ヶ方(現四万十市)、そして旧西土佐村半家(現四万十市)地区にしか伝承されていない。牛鬼は特に宇和島周辺に伝承されているが、四万十川中流域では旧西土佐村、旧十和村、旧大正町(現四万十町)、梶原町、旧東津野村(現津野町)にまで達している。厳しい顔つきの宇和島の牛鬼と比較すると、やさしさとひょうきんさが漂っている。

我々は、「高知県四万十川上・中流域のくらしと

音楽」調査研究は、第1回調査（1987年～1997年）および第2回調査（2012年～2014年）を実施している。本稿はその中から1992・1994（平成4・6）年と2013（平成25）年の半家地区に関する共時的・通時的調査・研究である。

Ⅱ. 西土佐地域半家地区について

旧西土佐村は1958（昭和33）年に、津大村と江川崎村の2村が合併し発足した。旧西土佐村は、高知県の西に位置し、北から西は愛媛県宇和島市・松野町・津島町、南は高知県宿毛市・四万十市（旧中村市）、東は四万十町（旧十和村）に接する。総面積は248.00km²、村の面積の91%を森林が占める典型的な農林業の村であった。

その後、2005（平成17）年4月に旧中村市と旧西土佐村が合併し、現在は四万十市となっている。四万十市ホームページによると、2016（平成28）年9月現在で、四万十市西土佐地域半家地区の人口は、196人（男97人、女99人）74世帯である。^①

半家地区について、四万十市西土佐総合支所産業建設課・宮地久美氏は次のように語っている。

半家地区は現在戸数としては59戸ほどで、四万十川沿いにあるため、農地面積は多い集落ではないです。川の増水を見込んだ桑を植え養蚕などを行っていましたが、昭和後期ごろを境に園

芸作物に切り替わっていきました。主に、シシトウ、なばなといったところでしょうか。水稲もありますが、自家消費米がほとんどで大規模ではないと思います。また、7割程度が第1次産業だと思いますが、ほとんど兼業農家ですね。林業も農林兼業がほとんどだと思います。漁業も兼業で漁期のみ季節的に行っています。最近は有害鳥獣、特に日本鹿の異常繁殖に伴う猟もしています。^②

また、近年では観光にも力を注いでおり、西土佐商工会は「西土佐火振り漁」「星の郷西土佐しまんと天の川まつり」をはじめとする様々なイベントを企画し好評を博している。

Ⅲ. 半家地区の秋祭り

1. 概要

半家地区には、奈路、出口、峯の3集落があり、年間をとおして様々な行事が行われている。（表1）

秋祭りは、11月7日・8日に天満宮で行われる。2011（平成23）年までは、11月1日・2日に行われていたが、神官さんがあちらこちらの地域を担当していることもあり、7日・8日に変更になった。半家地区の天満宮秋祭りは多彩な年中行事の中でも最大の行事である。

表1 半家地区の年中行事（平成26年度）（3）

月	行事名	場所	月	行事名	場所
旧1	毘沙門様	天満宮	7	夏大祭	天満宮
旧1	村祈祷	天満宮	8	お施餓鬼	寺など
旧1	初念仏	寺など	8	亡霊様	各組
旧3	上半期小祭	天満宮	8	大師様・地藏様	各組
旧3	薬師様	峯組	10	道作り・宮掃除	各組・天満宮
旧3	大師様・地藏様	各組	11	秋大祭宵宮	天満宮
旧3	地藏様	峯組	11	秋大祭	天満宮
旧4	薬師様	峯組	12	古もうし	天満宮
7	道作り	各組	12	お日待・下半期小祭	天満宮

2013（平成25）年11月8日は、13時45分より「寄せ太鼓」が奏され、14時15分から神輿の「神幸」が行われた。「牛鬼」を先頭に「神輿」「旗持ち」「五ツ鹿」「お多福」「鬼」が続く。沈下橋を渡った対岸の御旅所で神事を終えて神輿が本殿に戻ったあと、14時57分から「鹿の子」、15時18分から「花取り踊り」が演じられた。



神幸

2. 鹿の子（五ツ鹿踊り）

愛媛県南予地方の鹿踊りは、踊り手の人数によって五ツ鹿踊り、六ツ鹿踊り、四ツ鹿踊りなどと呼ばれる。宇和島の「八ツ鹿踊り」は江戸時代初期に宇和島藩主伊達家の関係で、仙台からもたらされた芸能で、「回れ回れ水車」の歌に合わせて、少年8人が鹿の頭をつけ胸に太鼓を抱えて踊る。一方、半家

地区の「鹿の子（五ツ鹿踊り）」は鹿の頭をかたどった被り物をつけた子5人（雄鹿4・雌鹿1）による踊りで、各自の体の全面に括りつけた締め太鼓を叩きながら行う。高知県高岡郡四万十町地吉、四万十市西土佐地域西ヶ方地区・半家地区の「鹿の子（五ツ鹿踊り）」は、歌詞に若干の差異はあるもので宇和島の鹿踊りの歌「回れ回れ水車」が歌われていること、一人立ちの鹿踊りであることなどから愛媛県南予地方の「八ツ鹿踊り」の影響をうけていると考えることができる。

1) 1994（平成6）年の鹿の子

半家地区の鹿の子は、花取り踊りの前に境内で踊られる。1960（昭和35）年頃より次第に断続的となり中断した。その後1991（平成3）年に復活し再び中断、2009（平成21）年から復活して踊られるようになった。踊り手は大人男性である。1994（平成6）年の調査時には「鹿の子」は演じられていなかった。

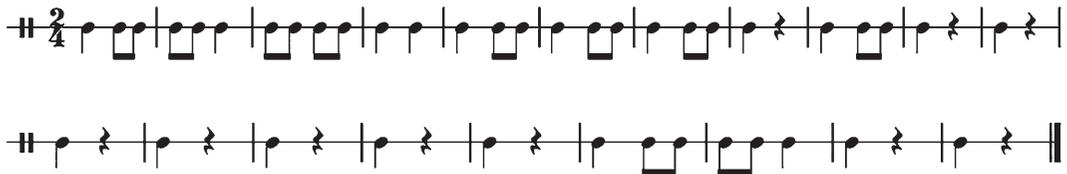
2) 2013（平成25）年の鹿の子

2013（平成25）年の鹿の子は次のような構成でおよそ18分間踊られた。

- ① 雌鹿を真ん中に一列で踊り、薙2枚を挟んで円型で踊る。（楽譜1）
- ② 4匹が座り雄1匹が中央で踊る。（これより楽譜2,「回れ回れ水車」）

楽譜1 鹿の子 リズムパターン 1

♩ = 50



楽譜2 鹿の子 リズムパターン 2

♩ = 50



[鹿の子歌詞 回れ回れ水車] (2013年11月8日
半家地区天満宮歌詞カードより)

1. まわれまわれ みずぐるま ほそくまわりて
せきにとまれな せきにとまれな
2. なかだちが こしにさしたる すだれやなぎの
えだうちそろえて
やすめなかだち やすめなかだち
3. 十三かわら これまでつれたる めんじしおう
は どなたのおにわに
かくしおかれた かくしおかれた
4. これのおにわに めががまいる なんぼさがし
でもおらばこそ ひとほきさきの
すすきのほのなか すすきのほのなか
5. むたのなかなる めんじしおうは なんととして
から
おびきだそうよな おびきだそうよな
6. かじやかすみを ふけや はらえ いまこそめ
んじし
あうぞうれしや あうぞうれしや
7. おきとなかの いそちどりが なみにゆられ
たちをかねるな たちをかねるな

8. しらさぎが あとをおもえば たちかねる み
ずもにごさぬ
たてやしらさぎ たてやしらさぎ
9. きょうで ごかんの かのえのびょうぶ ひと
えにさらりと
たてやならべな たてやならべな
10. しかのこは うまれていずれば おどりでる
われらもみまえに
おどりでよがし おどりでよがし
11. くにかからも いそぎもどれと ふみがきた
おいとまもうして さあかえろ

③ 雄2匹が雌鹿の廻りを立って踊る、片足（ケンケン）で跳ぶ。

④ 4匹が座り1匹が立って踊る。

⑤ 5匹が左廻りに踊る。（2匹は片足（ケンケン）で踊る）

⑥ 5匹が一列で踊り、その後円型で踊る。

2013（平成25）年は、半家地区に五ツ鹿踊りを伝えたという西ヶ方地区でご不幸があり、「五ツ鹿踊

表2 花取り踊りの構成（1994年）

演目名		基本的なリズム	テンポ	踊り手・採り物	所要時間
①切り出し		A	♪ ≒ 48	大太刀（大人4名）	3' 18"
②太刀	1. 名称なし	B	♪ ≒ 96	大太刀（大人） 小太刀（子ども） *大太刀と小太刀は同 数ただし人数は決ま っていない。	1' 08"
	2. もじり	C	♪ ≒ 86		1' 15"
	3. 三つ切り	A	♪ ≒ 48		1' 14"
	4. 上切り	B	♪ ≒ 96		1' 08"
	5. 下切り	C	♪ ≒ 84		1' 14"
	6. 五つ切り	A	♪ ≒ 48		1' 17"
花の御礼					
③鎌の手	1. 名称なし	D	♪ ≒ 100	鎌（シデ） *人数は②と同じ	1' 05"
	2. 手のひら（目の下のハチ）	C	♪ ≒ 92		1' 23"
	3. 逆手	A	♪ ≒ 50		1' 25"
	4. 招き	D	♪ ≒ 100	鎌（シデ） *人数は②と同じ	1' 17"
	5. 糸巻き	C	♪ ≒ 92		1' 20"
	6. 結び	A	♪ ≒ 50		1' 30"
④太刀	1. 腰つけ（鉄砲）	B	♪ ≒ 96	大太刀（大人） 小太刀（子ども） *人数は②と同じ	1' 07"
	2. 鳥とび	C	♪ ≒ 80		0' 58"
	3. 車（水車）	A	♪ ≒ 48		3' 11"
				（合計）	23' 50"

り」と「花取り踊り」が中止、高岡郡四万十町地吉ではご不幸があり3名が参加できないため「鹿踊り」が中止、そのため本年度は高知県下のここ半家地区だけが「鹿の子」(五ツ鹿踊り)を実施したことになる。



鹿の子

3. 花取り踊り

半家地区の花取り踊りは、歌は伴わず、インター

バルの後、踊りを開始するときには太鼓の叩き手が念仏(「ナムム」)を発声すること、演目ごとにリズムが打ち分けられているということ、踊り手の「ホイ(ハイ)」という掛け声が鉦打ち太鼓と「手拍子」と呼ばれる銅拍子のリズムによって盛んに発せられることが大きな特徴である。

1) 1994(平成6)年の花取り踊り

1994年の秋祭りは11月1日・2日に実施された。花取り踊りは、境内に作られた注連縄による囲いの中で行われる。踊り手は、大人(15~53歳)が担当する<大太刀>17名と、子ども(小・中学生)による<小太刀>17名(うち女子3名)の計34名であった。衣装は着物(<大太刀>は黒の着物,<小太刀>は青のハッピ)、たくり(<大太刀>は水色,<小太刀>は赤 多少の例外あり)、白鉢巻、たっつけ、脚絆、素足に草履、採り物は大太刀・小太刀・鎌でおよそ24分間、踊りが繰り広げられた。楽器は、子どもが演奏する鉦打ち太鼓1台と大人が演奏する

楽譜3 花取り踊りの基本的なリズム

A

鉦打ち太鼓

手拍子

4/4

掛け声
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ

B

鉦打ち太鼓

手拍子

4/4

掛け声
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ

C

鉦打ち太鼓

手拍子

4/4

掛け声
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ

D

鉦打ち太鼓

手拍子

4/4

掛け声
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ
ホイ

銅拍子1組で、踊り場の中央で奏でられた。

半家地区の花取り踊りは、①切り出し、②太刀(太刀踊り)、③鎌の手(鎌踊り)、④太刀(太刀踊り)で構成されている。(表2)(楽譜3)

2) 2013(平成25)年の花取り踊り

踊り手は保育園2名、小学生14名、高校生2名、大人10名の計28名であった。衣装は着物(＜大太刀＞は黒の着物、＜小太刀＞は青のハッピ)、たくり(＜大太刀＞は水色、＜小太刀＞は赤 多少の例外あり)、白鉢巻、たっつけ、脚絆、素足に草履、採り物は太太刀・小太刀・鎌、楽器は、鉦打ち太鼓1台と銅拍子1組で1994(平成6)年時と同様である。踊りは、以下の構成で、およそ26分間繰り広げられた。

2013(平成25)年の半家地区の花取り踊りは、①切り出し、②太刀(太刀踊り)、③鎌の手(鎌踊り)、④太刀(太刀踊り)で構成されている。①切り出しは大人4名が横に並び踊る。②以下は＜大太刀＞＜

小太刀＞が交互に並んだ円形で、途中二重円になることはあるが、踊り始めと踊り終わりには一重円となる。＜太刀＞の部分の踊りは勇壮であり、＜鎌の手＞の部分の踊りは、リズムカルである。四方の注連縄は切らず、最後に回収する。(表3)(楽譜3)

練習は、10月から水曜日・金曜日・土曜日の19時半から21時まで半家集会所で行われており、地区を



花取り踊り

表3 花取り踊りの構成(2013年)

演目名		基本的なリズム	テンポ	踊り手・採り物	所要時間
①切り出し		A	↓ ≒ 50	大太刀(大人4名)	3' 28"
②太刀	1. 名称なし	B	↓ ≒ 96	大太刀(大人) 小太刀(子ども) *大太刀と小太刀は同数ただし人数は決ま っていない。	1' 28"
	2. もじり	C	↓ ≒ 86		1' 29"
	3. 三つ切り	A	↓ ≒ 96		1' 36"
	4. 上切り	B	↓ ≒ 96		1' 05"
	5. 下切り	C	↓ ≒ 86		1' 21"
	6. 五つ切り	A	↓ ≒ 96		1' 31"
花の御礼					
③鎌の手	1. 名称なし	D	↓ ≒ 96	鎌(シデ) *人数は②と同じ	1' 08"
	2. 手のひら(目の下のハチ)	C	↓ ≒ 84		1' 29"
	3. 逆手	A	↓ ≒ 52		1' 32"
花の御礼					
③鎌の手	4. 招き	D	↓ ≒ 96	鎌(シデ) *人数は②と同じ	1' 26"
	5. 糸巻き	C	↓ ≒ 84		1' 30"
	6. 結び	A	↓ ≒ 50		1' 36"
花の御礼					
④太刀	1. 腰つけ(鉄砲)	B	↓ ≒ 96	大太刀(大人) 小太刀(子ども) *人数は②と同じ	1' 03"
	2. 鳥とび	C	↓ ≒ 80		1' 06"
	3. 車(水車)	A	↓ ≒ 52		3' 36"
				(合計)	26' 24"

あげて花取り踊りの伝承に取り組んでいる。

4. 伝承における半家地区の特徴

半家地区の1994（平成6）年の調査と2013（平成25）年の調査を花取り踊りを中心に比較する。相違点、類似点は以下のとおりである。

1) 相違点

踊り手が34名から28名に減少したこと、踊り手の低年齢化（2013年には2歳半の女子が参加）が挙げられる。祭りへの寄付者をよみあげる「花の御礼」は、1994（平成6）年は、②太刀（太刀踊り）と③鎌の手（鎌踊り）の間に1回行われたが、2013（平成25）年は、②太刀（太刀踊り）と③鎌の手（鎌踊り）の間、③鎌の手（鎌踊り）の3演目の後、③鎌の手（鎌踊り）と④太刀（太刀踊り）の間の3回実施された。

2) 類似点

衣装、採り物、楽器は同じである。太鼓、手拍子のリズムとテンポ、踊りの形はほぼ変わらず伝承されていることがわかる。踊り手の発する「ホイ（ハイ）」という掛け声も、変わらず活発に行われていた。

半家地区区長の河野光伸氏（昭和41年生）は、次のように語っている。

半家の住民は子どもの時にはほぼ全員が花取り踊りを踊ることから、小学生になったら踊れるという憧れの気持ち、踊ることができたという自信や達成感を味わっていること、そして、花取り踊りや牛鬼をはじめとする芸能を絶やしてはいけない、行わなくてはならないという意識が強い。⁽⁴⁾

他の集落では踊りが中止になるケースも見られるが、ここ半家地区では「鹿の子」の復活など一連の芸能を受け継いでいこうという積極的な姿が感じられる。2013（平成25）年の調査時は祭りのギャラリーも多く、地域の子どもが通学している西土佐小学校の児童も地域文化の学習の一環として教師に引率されて見学に来ていた。

IV. おわりに

全国的な例にもれず、高知県四万十川中流域も過疎の波が大きく寄せてきている。2012（平成24）年11月18日の梶原町松原天神宮、2013（平成25）年11月25日の旧大正町下津井住吉神社、旧西土佐村（現四万十市）藤ノ川河内神社などでは小学校が閉校や休校となっている。日常的に子どもがいなくなった集落の秋祭りでは、その期間だけ子どもを呼び寄せて挙行していた。また2013（平成25）年11月10日の旧東津野村船戸の河内五社神社の秋祭り調査では、始発の須崎市から当地までの45分間、バス乗客は一人であった。2013（平成25）年11月23日の旧十和村（現四万十町）下道春日神社では、世帯13戸23人の住民による秋祭りであった。さらに旧十和村（現四万十町）地吉八幡神社は、バス便が週2日しかないという状態に置かれている集落における秋祭りであった。そして四万十川中流域は猿、猪、鹿による農作物被害が後をたたく、生活自体に大きな影響を及ぼしている。

このような現実の中で、祭りを挙行することは極めて困難となってきている。祭りはコミュニティを維持・発展させる大きな役割を果たしてきた。しかしこれらの現実にはコミュニティの崩壊＝限界集落化から断絶集落化を引き起こしてきている。

一方、極めて限られているが、半家地区の秋祭りは以前のカタチを回復してきている。第1回調査時では「鹿の子」が中断し、御神幸にのみ随行していたのが、第2回調査では踊りが復活していた。確かに踊り手が減少し、踊り手が低年齢化してきているが、「花取り踊り」の構成自体は第1回調査時より増加している。コミュニティが縮小していく中で、子ども期に「花取り踊り」をほぼ全員が体験し、継承への地区民の意識も高いことがこの祭りを支えている。ただ、過疎化の影響から再度この祭りを縮小化に向かわざるをえないことになるかもしれない。半家地区の西土佐小学校児童が見学に来ていたように、小学校が存在し子どもが担い手や見学者として祭りに関わるのが一つの要因とも言えるのではないか。もちろん第一次産業が振興し、住民が働

く場を確保することが第一次的に重要だが、小学校が存立し、子ども集団が形成されることも大きな要素である。これらが第1回調査(1987年～1997年)および第2回調査(2012年～2014年)という共時的・通時的調査・研究から明らかになったことである。

なお執筆は、Ⅱ. 西土佐地域半家地区について
Ⅲ. 半家地区の秋祭りは川内由子, Ⅰ. はじめに
Ⅳ. おわりには岩井正浩が担当している。

本研究をすすめるにあたり、ご協力くださいました半家地区区長・河野光伸氏, 四万十市西土佐総合支所産業建設課・宮地久美氏, 半家地区住民の皆様
に心より御礼申し上げます。

[註]

- (1) 出典：<http://www.city.shimanto.lg.jp/>
四万十市公式ホームページより(検索日：2016年9月29日)
- (2) 2016年7月 宮地久美氏に電話, 電子メールで取材
- (3) (4) 2014年5月 河野光伸氏に電話で取材

[参考文献]

- 岩井正浩 他 「四万十川上・中流域のくらしと音楽
〔Ⅵ〕 - 高知県幡多郡西土佐村半家地区 -」 神戸大学
発達科学部研究紀要 第3巻第1号 1995
- 岩井正浩 「川奥の花取踊り：その継承と変遷」 愛知淑徳
大学論集 教育学研究科篇 第4号 2014
- 岩井正浩 「『高知県四万十川上・中流域のくらしと音楽』
の通時的研究：論考集」 愛知淑徳大学特定課題研究報
告書 2015
- 高木啓夫 『土佐の民俗』 高知市文化振興事業団 1986

抄 録

1987年以来、我々は、四万十川上・中流域のくらしと音楽を研究してきた。音楽学的研究を中軸におき、同時に、民俗・産業・宗教に関する調査を行い、くらしと音楽の関連性多面的に明らかにすることを目的としている。本稿では、四万十市西土佐地域半家地区をとりあげた。

1992年、1994年、2013年11月に同地区の「天満宮」で「秋祭り」の民俗芸能を調査した。秋祭りの中心的な芸能は「花取り踊り」と「五ッ鹿踊り」であった。

秋祭りの「花取り踊り」は以前のスタイルを保ち、「五ッ鹿踊り」は、半家地区の以前の形態を回復していることが明らかになった。祭りは、地域のコミュニティの維持と発展に大きな役割を果たしており、地元住民にとっては、伝統と民俗芸能の継承に対する高い意識が求められている。

キーワード：花取り踊り，五ッ鹿踊り，半家地区